

最近僕に「お前は共同体指向を放棄したんだろう」と親切に云つて下さる人がいたりします。が、あえて僕自身から言わないと(疑問)を毒拳で進めます。僕はあくまで「村落を共同体」という考えは変えていません。だけれど本紙(いや貴紙)「コミュニオン往来ではむしろ(なにをいよりも)ただ(ど)」「村落に共同体」と(地球の中に交感する形態として)といった動きが感ぜられます。(どちらが絶対的か)というのでは有りません。僕自身の考えです。でね、尾関氏が「共同体は直線的向上運動である」と言つておられるように住民の中から意識として噴出するよう運動しなければならぬのでは?

今井氏のように、肉拓地へ入り雑木に共同体思想を、共同体のよさを伴ひ人々に訴えるのが必要のように思っています。僕は共同体運動として未だ何もやっていません。だけれど、どこか土地を牛に入れてすぐ農園を開くことよりも、共同体へ向えるような行動をとりたいたいと思っています。具体的に何から始めるかも書けないのが残念です。 Y.M

### 共同体への経済学的アプローチ

#### 人間的要因への回帰

現在の社会主義経済論で、セントラルプランニングを想定しないものはきわめてまれです。D.G.H. コール位のものではないでしょうか。セントラルプランニングの想定はマルクス主義の影響でしょう。拡散的モデルは必ずしも不可能なことではないでしょう。しかも私は社会主義経済では、完全競争モデルを基礎としたような拡散一方の経済は成立しがたいのではないかと考えています。完全競争モデルが最も合理的だというのは神話に過ぎません。経済的には何らかのセントラルプランニングが必要でしょう。それ自体は、自由連合の原理から導き出されるものという感じがします。問題はセントラルプランニング自体の是非ではなく、それに至る過程と、その執行の過程です。この点を誤らぬようにすべきではないでしょうか。例えばいさば資源の最適分配、将来の資本蓄積等は、セントラルプランニングで行う方が、経済的であるうと思えます。

経済学的な観点からでは、セントラルプランニングをとるか否かは、前提的な要因です。というのは、セントラルプランニングが、経済的に合理的であるかどうか(もちろんこれは比較的問題なのですが)は、人間的要因へと回帰していかざるを得ないからです。

#### 現体制下での共同体経済の可能性

現体制下での並行的な共産主義的ないし社会主義的経済の進行というのには、私は疑問視せざるを得ません。まず工業的共同体(このような考え方は今の共同体論にあるのかどうかは知りませんが)では、資本技術からして、資本主義企業より優位に立つことはできません(これは断言してもいいと思えます)とすれば、総合的自給的共同体でない限り、成立しようがないわけですね。

農業的共同体は、それに比べれば、自給自足が可能であるだろうという点で、もし閉鎖的能度とれば、成立し得る可能性は多いだろうと思えます。但し、これには極めて高度な精神性が必要なことは疑いの余地

はないでしょうか。第一に資本主義経済との交感をしようとするれば、収支を少くとも合せねばなりません。それには、資本主義農業以上の生産性が必要です。これが保証出来るかどうかです。それに、精神性の持続というのには短いものです。共同体が閉鎖的なものでは、それこそモデル的なものとなるように思えます。いづれにせよ私は併行的進行の可能性は少ないと思えます。

首下 浦 公 英

#### わたしの共同体観 アンケート

「解放」「平等」「平和」の同義語として僕は「共同体」という言葉を発している家です。しかし「共同体観」というものも「共同体」というイメージは持たないのです。というのは「解放」という概念はとり取り上げてみても(今書いちゃったけど)さだかでない。どういふ関係の状況で「解放」というのが? どういう状況で「解放」でないのか? それを明確にしない。その辺をまず、僕は問題意識の対象として、今、仮りに、その解答が何らかの形で得られたとすると、次に状況として、現実とみる作業が必然となると思えます。それから、こう、実験と理論化と実験というサーキュレイションを連続していくベシだと考えます。だから、僕の共同体観は現在にして人幻想形(未だにして)へ不定形(未だ)となるのでしよう。無現(現)こじつけは…… 塗装農業 O.Y

#### わたしの共同体観 アンケート

関心は十分持っています。もう少し考へ方が甘いのではありませんか。十分腹をすえてやって下さい。人類幸福のため御健手を祈ります。

製造販売業 N.O

### 一夫一婦は砂の城

そろそろこのプリントの内容が、前からの知人や友人に理解されるとも思えなくなってきたので、川に紙の舟をうかべて風のままに流れのままに放ちやるみたいになるべくは未知の、全くのハッピーニングで、舟に舟をのぼす人々の目に止まればいいと思っている。

何かを感じたとしても、また私の文がヒントになつてその人の人生が大きく変わったとしても、それは全体の仕組で必然的にそうなっているだけのことであつて、私が文を書き印刷し配布するもの、そういう「時の必然」のひとこまにしか過ぎない。

だから私に感想を書き送る義務はないし、とにかく義理はなにもない。私は「運動」をあるべき気はないし、信者も友人もいらない。独りこの世に生れ、また独りで火葬場にはこぼれるまで、つかのまの数十年前、すこしはあたりをにややかしたとしても、べつに何という事はない。歌は人生の基調、ひとりでも耳をかたむけてしまふ、バックグラウンド、ミュージックみたいな……。

なにやかやと文藝に技巧をこらしても無駄なこと。とにかくウーマン、リブのもつとも徹底的に差別は日版がわが女房の身の上(そして身の中や下までも)におこつたというだけのことである。(後附に足を運ぶ日本)



